

人間社会学部

試験問題冊子

(A日程 1月27日)

国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の 内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の 1 14、記述式解答欄の A J のみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

ガジェットが大好きなので、新しい電子デバイスが出るとすぐに買ってしまおう。iPadも発売当日にゲットした。さっそく電子書籍なるものをダウンロードして読書を試みる。電子書籍の出現によって紙の本の命脈が a のではないかという論が巷間に流布¹している¹ので、その当否を身を以て吟味してみようというのである。結論はすぐに出た。

紙の本はなくならない。というか、紙の本という確固とした基盤ぬきにはそもそも電子書籍というものは存立することができないというのが私の結論である。その理由を以下に述べる。

電子書籍の第一の難点は「どこを読んでいるかわからない」ことである。

たしかに頁をめくると「ばらり」と音がしたり、頁がたわんだり、反対側の活字が透けて見えたりと、紙の本を読んでいる状態を b には経験できる。だが、残り、何頁で、あるかがわからない。いったい自分が物語の中のどの部分を、どの方向に向かって読み進んでいるのかわからない。

自分が全体のどの部分を読んでいるかを鳥瞰的に絶えず点検することは（あまり指摘する人がいないが）読書する場合に必須の作業である。というのは、ある文章が冒頭近くにあるか、中程にあるか、巻末が迫ったところにあるかによって、その文章の解釈可能性に大きな差異が生じるからである。

例えば、推理小説の場合、「いかにも怪しげな人物」が物語のはじめの方に登場してきた場合には、ある程度小説を読み慣れた読者は「この人は犯人ではなく、いわゆる「レッドヘリング」（読者を誤った推理に導くための偽りの手がかり）」である可能性が高い」という推論を行う。作者の方は読者をミスリードするために次々と「レッドヘリング」を投じてくる。「残り頁数」はその真贋²判定の重要な手がかりである。「残り頁数」がある限度を切ると、そこから後は「読者をミスリードするようなトリック」はもう出てこないからである。そういう「ポイント・オブ・ノー・リターン」が存在する。グラウンドレベルで読み進んでいる自分を「読み始めから読み終わりまでの全行程を上空から鳥瞰している仮想的祝座」からスキャンする力がなければ、そもそも読書を楽しむということは不可能なのである。その消息は音楽を聴く場合と変わらない。

音楽というのは、「もう聞こえない音」がまだ聞こえ、「まだ聞こえない音」がもう聞こえるという、時間意識の拡大を要求する。私たちはまるで当たり前のように「センリツ³」とか「リズム」とかいう言葉を口にしてはいるが、これは「もう聞こえない音」を記憶によって、「まだ聞こえない音」を先駆的直感によって、現在に引き寄せることで経験しているから言えることなのである。そして、この音楽的経験は、「もう聞こえない音」「まだ聞こえない音」の範囲が広げれば広いほど深く厚みのあるものになる。現在の前後数秒の音しか再生できないというショート・メモリーの聴き手と、数十分の交響楽の最初

から今までのすべての楽音を今再生でき、それを踏まえてこれから後の曲想の展開を予期しうる聴き手では、同一の楽音から引き出すことのできる快樂の質が違う。

私はその能力を「マッピング（地図上に自分の位置を記すこと）」と呼ぶのであるが、これは単に読書や音楽鑑賞に止まらず、人間が生きてゆく上で必須の能力なのである。

「おのれ自身を含む風景を鳥瞰する力」。ヘーゲルだったらそれを「自己意識」と呼ぶだろうし、フッサールだったら「超越論的主観性」と呼ぶだろう。別に何と呼んでも構わないが、それは人間が生きる上で不可欠の能力である。c、読書はその力を涵養するための好個の機会なのである。

私たちは物語を読んでいるときに、つねに「物語を読み終えた未来の私」という仮想的な消失点を想定している。読書とは、「読みつつある私」と、物語を最後まで読み終えずすべての人物のすべての言動の、すべての謎めいた伏線の「ほんとうの意味」を理解した「読み終えた私」との共同作業なのである。紙の本では頁をめくることに、「読みつつある私」と「読み終えた私」の距離が縮まり、それと同時に「読み終えた私」の感じている愉悦が少しずつ先駆的に先取りされる。そして、最後のページの最後の一行を読み終えた瞬間に、ちょうど山の両側からトンネルを掘り進んだ工夫たちが暗黒の一点で出会って、そこに一気に新鮮な空気が流れ込むように、「読みつつある私」は「読み終えた私」と出会う。読書というのは、そのような力動的なプロセスなのである。

電子書籍はこの「読み終えた私」への小刻みな接近感を読者にもたらしることができない。紙の本という三次元的実体を相手にしているときには、「物語の終わりの接近」は指先が抑えている残り頁の厚みがしだいに減じてゆくという身体実感によって連続的に告知されている。だが、電子書籍ではそれが無い。仮に余白に「残り頁数」がデジタル表示されていても、電子書籍読書では、「読み終えた私」という仮想的存在にはパーティへの招待状が送られていないのである。

第二の難点は、電子書籍では「宿命的な出会い」が起こらないということである。

書店にいと、その題名も著者名も知らない本に、まるで引き寄せられるように近づき、それを手に取ったときに「自分が今まさに読みたいと思っていたその本」に出会うということが起こる。題名も著者名も主題も何も知らぬまま「何となく本を手取る」とき、私たちがその本に「惹きつけた力」とは何なのであろう。それがどのような本であるかについての予備知識がないにもかかわらず、その本の私たちにとつての死活的重要性が先駆的にわかるということはなぜ起きるのであろう。説明は二つある。

一つは、本の送り手（書き手も編集者も装幀家も書店員も含めて）がその本に敬意と愛情を込めている本には固有のオーラがある、ということである。長年使い込んだ道具に「手沢」がつくように、送り手たちの「思い」のこもった本には独特の「つや」が出る。私たちは書店を遊弋しているときに、その「つや」に反応する。作家が書き飛ばし、出版社もやつつけ仕事で送り出し、書店員もなぜやりに配架したような本には、その「つや」がない。それは、物質的にわかる。

もう一つは「こじつけ」である。「なんとなく」手に取った本のどうでもいいような一行が「自分の人生を決定づける宿命の一行」であったというのは、実は本を読んだあとに思いついた「あとぢえ」である。どんな本でも、真剣に読めばものの考え方や感じ方が多少は変わる。一読して変わったあとの自分を「より本来的な自分」とあると思

込めば（人間は必ずそう思い込む）、その本との出会いはおのれの進むべき道を指し示す、宿命との出会いだっただけのことになる。

「こじつけ」なのだが、それでよいのである。ただし、「宿命と出会う」ためには、そこに偶然がなければならぬ。

どの本を手にとってもよかつたのだが、他ならぬその本を「たまたま」手に取ってしまったという偶有性が保証されていなければ、「宿命」という言葉は出てこない。そのためには「事前にその本については、いかなる予断も持っていなかった」という自己申告が不可欠である。書評で絶賛されていたり、友だちに熱心に勧められたり、夏休みの課題図書であつたりした本は、どれほど面白く読んでも、それを「宿命の出会い」だと言いつづけることはできない。そこには人為が介在しているからだ。

「宿命の本」との出会いのためには、「独特のオーラに反応して、引き寄せられるように手に取った」という「物語」がどうしても必要である。そして、それは紙の本でしかなしえない。「いつかこの本が私にとつて死活的に重要なものとなるかもしれない」という種類の先駆的直感⁴は電子書籍については起動しないからである。電子書籍の最大のメリットは、いつでもオン・デマンドで、タイムラグなしにアクセスできるということなのだが、まさにそのメリットゆえに私たちは電子書籍の選書において先駆的直感を必要としない。電子書籍はスーパーリアルに「今読みたい本、読む必要がある本」を私たちに届けてくれる。その代償として、電子書籍はその本との宿命的な出会いという「物語」への共犯的参加を読者に求めない。電子書籍は実需要対応の情報入力源である。欲望も宿命も自己同一性も、そのようなロマネスクなものに電子書籍は用事がない。けれども、読者はしばしばそちらの方に用があるのである。

口承が中心であつた時代から、書きものに媒体が移つたとき、私たちの脳内で活発に機能していた「長い物語を暗誦する能力」は不要になつた。それと同じように紙の本から電子書籍に媒体が移るとき、書物と出会い、書物を読み進めるために、私たちが必要としていた機能の「何か」が失われる。私にはそれは失つてはならないもののように思われる。紙の本はなくなると私は思っているが、それはコストやアクセシビリティや携帯利便性とはまったく無関係な次元の、人間の本然的な生きる力の死活にかかわっている。

（内田樹「活字中毒患者は電子書籍で本を読むか？」

池澤夏樹編『本は、これから』

問1 傍線部1、2の漢字のよみをひらがなで、傍線部3、4のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 2 3 4

問2 空欄 に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 切られる ② 廃れる ③ 尽きる ④ 終わる

問3 空欄 に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 瞬間的 ② 理論的 ③ 擬似的 ④ 刹那的

問4 傍線部ア「快樂」と同じ意味で使われている語を本文中から一つ抜き出して記述式解答欄に記入しなさい。

問5 傍線部イ「人間が生きてゆく上で必須の能力」と筆者が述べる例として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① マッピングする力
② 物語を暗誦する力
③ 時間意識を拡大する力
④ 読書する際に、その全行程をスキャンする力

問6 空欄 に当てはまる接続詞として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① つまり ② したがって ③ そして ④ しかし

問7 傍線部ウ「電子書籍読書では、「読み終えた私」という仮想的存在にはパーティーへの招待状が送られていない」の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 電子書籍における読書は、「読みつつある私」と「読み終えた私」の共同作業であるため、その片方にだけパーティーの招待状が届くことはない。
② 電子書籍読書における「物語を読み終えた未来の私」という消失点は、あくまでも仮想的なものにすぎないため、パーティーへの招待状を送ることができない。
③ 電子書籍で物語を最後まで読み終え、その物語の本当の意味を理解してしまった人は、もはやわくわくする気分にはなれない。
④ 電子書籍読書では「読み終えた私」という仮想的な消失点を想定し難いので、「読みつつある私」と「読み終えた私」が出会う瞬間の喜びが予感できない。

問8 本文中に挙げられた紙の本の特徴として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

6

① 今読みたいと感じたり、今読む必要があると感じたときにすぐに手に入れることができること

② その本との宿命的な出会いという「物語」への共犯的参加を読者に求めやすいこと

③ 実需要対応の情報入力源となること

④ 「いつかこの本が私にとって死活的に重要なものとなるかもしれない」という先駆的直感を必要としないこと

問9 筆者の考えに最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

① 題名も著者名も知らない本との運命的な出会いが起こる説明の一つは「こじつけ」である。

② 音楽は、「もう聞こえない音」を記憶によって、「まだ聞こえない音」を先駆的直感によって現在に引き寄せるという点で、読書とは異なる。

③ 自分が全体のどの部分を読んでいるかを鳥瞰的に絶えず点検することは読書をする場合に必須の作業であるが、電子書籍ではその作業が不要である。

④ 読書には力動的なプロセスがあるが、それは紙の本でも電子書籍でも同様に存在する。

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

インターネットの登場から現在に至るまで、さまざまなICTが生み出され、それらをもとにIT革命が起こった。eコマースがリアル店舗を脅かし、スマホが急速に社会に普及していった。少し前までCDやDVDで楽しむのが当たり前だった音楽や動画も、いまではアップル (Apple) やネットフリックス (Netflix) などが提供するストリーミング配信が主流となりつつある。

こうした現象を見る限り、これまでの「助走期」にもデジタル化はかなりのスピードで進展してきたように思える。

実際、B2C^注の分野では、デジタルが人々の生活を大きく変え始めている。スマホを利用してはいる私たち自身も、もはやデジタルとは無縁ではない。日々のニュースや天気予報を、紙の新聞やテレビではなくスマホアプリでチェックしている人も多いだろう。

しかし、一歩引いた視点で見渡してみると、世の中はアナログで溢れている。そこにはデジタル化されていない膨大な量の物的資産がある。私たちの仕事や生活のなかにも、経験や勘に頼って行われている膨大な量のアナログプロセスがある。これまでデジタル化されてきたのは主にインターネット上で生成されたウェブデータであり、リアルな世界でデジタル化されているものはごく一部にすぎなかった。

ビジネスのリョウイキ¹でも、デジタル化が求められてきた業界は少数だった。IT企業やネット企業、一部の先進的な企業がデジタルを積極的に取り入れてきたものの、その他の大部分の企業は依然としてアナログの世界でビジネスを展開してきた。

しかし、これまでの「助走期」を経て、デジタル化に舵を切るためのインフラは整った。データ収集やデータ分析のツールも安価に利用できるようになった。グローバル化や経済の成熟化を背景として企業間の競争はますます激しくなっている。デジタルを取り入れて生き残りを図ろうとする企業は、確実に増えていく。

ここ数年、グーグルなどのIT企業がテクノロジを武器にして異業種に参入する動きが活発になっている。いわゆるディスラプション (創造的破壊) である。これらの業界では、強い危機感を持ってデジタル化を図ろうとする企業が少なくない。また、製造業のなかには、コマツのように競合他社に先駆けてIoTを取り入れ、競争力を大きく高めた企業も現れ始めている。

こうした動きは、今後、少しずつ加速していく。「助走期」から「a期」への移行はすでに始まっていて、これからデジタルは長い年月をかけて社会の隅々に浸透していくだろう。

ただし、それがどの業界、どの企業から進むのかはわからない。業種や企業規模というよりも、属人的な要素が大きいからだ。経営トップが強い危機感を持っている企業、デジタルの必要性を強く意識している企業から、デジタル化が始まっていく。そして、それらの企業が一定の成果をあげることによって、さまざまな企業・業界に広がっていくのではないだろうか。

先ほど私は「デジタルは長い年月をかけて社会の隅々に浸透していく」と述べた。その根拠は、デジタル化を推進するICTが現代における汎用技術²だからである。

汎用技術とは、特定の生産物だけに関係するものではなく、あらゆる経済活動で利用

され、関連する分野が非常に広い技術を指す。18世紀の産業革命で生み出された蒸気機関やその後、蒸気機関に代わって導入された電気が、代表的な汎用技術として挙げられる。

電気は19世紀末に電灯事業で利用が始まったが、工場イの動力としての利用は遅れ、工場の電化によって産業の生産性が上昇したのは1920年代以降のことだった。その間、およそ40年が経っている。働き方や組織の体制を変えなければ、工場の蒸気機関を電気に替えることができなかったからだ。

現代の私たちは電気の利便性をよく知っているので、「さっさと電気に替えればよかったの」と思いがちだ。しかし、電気に替えるためには工場の設備やレイアウトをガラリと変えなければならぬし、職人さんの働き方も変えなければならない。彼らには変わった後のことが想像できないので、心理的な抵抗が強く、なかなか意識を変えることができない。汎用技術が行き渡るまでに長い年月がかかる大きな要因はここにある。

現代の汎用技術であるICTについても同じことがいえる。デジタル化を進めるには、組織や働き方などの変革が必要となる。

モノづくり企業では、デザインから設計、原材料3チョウツ、製造、物流、販売に至るまで、**b**の意思決定の流れに適した組織が構築されている。しかし、製造したモノにセンサが組み込まれ、センサから得られたデータを設計や製造に反映できるようにすると、情報が**c**にスムーズに流れる必要がある。**b**の流れに適した組織では、情報が**c**に流れにくいので、最適な組織形態を模索することが求められる。

組織の体制を変えれば、それに合わせて従業員を配置し直す必要が生じる。一人ひとりの仕事のやり方も変えなければならない。それが現場の反発を招き、変革の障害となる。ICTが進化するスピードは蒸気機関や電気よりもはるかに速いが、人の意識は昔も今もほとんど変わらない。

では、デジタルが社会に浸透し、真の意味でデジタル社会が到来するのはいつごろになるのか。ある産業がバブルの崩壊を経て台頭するまでの歴史を振り返ると、30〜40年で本物になるという見方ができる。

1850年にイギリスで「鉄道バブル」が崩壊した。1840年代に鉄道会社が相次いでロンドン市場に上場すると、鉄道が儲かりそうだという⁵ことで投資家が鉄道株にサットウした。鉄道会社にお金が集まり、各社が競って全国に線路を敷設するようになるが、6000マイル（1万キロ弱）もの線路を敷設したところでバブルが弾けた。しかし、結局のところイギリスの鉄道が黄金期を迎えたのは、それから30〜40年後の1880年代から90年代になってからだった。

1929年の世界大恐慌は、ニューヨーク証券取引所における自動車株と電力株のバブルが崩壊したことがきっかけと言われている。自動車株と電力株が急上昇したことでバブルが始まり、一時はアメリカだけで自動車メーカーが300社もあった。しかし道路が舗装され、高速道路が整備されて自動車4が社会のインフラとなったのは、1950年代から60年代だった。ということは、やはりバブルが弾けて30年ほど経ってからのということになる。

それらを踏まえると、インターネットバブルが2000年ごろに弾け、2008年にリーマンショックで再びバブルが弾けてから、まだ10年ほどしか経っていない。そう考えると、デジタルが社会の隅々に行き渡り、真の意味でデジタル社会が到来するのは、

いまから約20年後の2040年以降になるのではないかと考えられる。

ただ、私が言っているのは「行き渡る」までの期間であって、その動きはすでに始まっていることを忘れてはならない。ひとたび流れができれば一気に加速していく。初期の段階で主導権を握った者が勝つのは間違いない。つまり、早く動いた者が勝ち、後れを取った者は負ける。それはどの分野のどんな競争でも変わらない。

d、デジタル化とは距離がありそうな農業の分野でも、デジタル化に意欲的に取り組んでいる生産者がいる。その一方でデジタル化は必要ないという生産者も多く、この人たちの意識が変わりデジタルが浸透するまでには長い年月がかかるという意味だ。後れを取ったら、たとえ生き残れたとしても先頭グループを走るのは難しいだろう。

(森川博之 『データ・ドリブン・エコノミー』)

注 B2C：Business to Customer の略で、企業と一般消費者の取引のこと。

問1 傍線部1、3、5のカタカナを漢字に直し、傍線部2、4の漢字のよみをひらがなで、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 **F** 2 **G** 3 **H** 4 **I** 5 **J**

問2 傍線部ア「世の中はアナログで溢れている」と筆者が言う理由として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 **8**

- ① 仕事や生活のなかに膨大な量のアナログプロセスがあるから。
- ② デジタル化されてきたのはインターネット上のウェブデータだけであるから。
- ③ リアルな世界でデジタル化されているものはごく一部にすぎないから。
- ④ 大部分の企業はアナログの世界でビジネスを展開しているから。

問3 空欄 **a** に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 **9**

- ① 停滞 ② 巡行 ③ 禹歩 ④ 飛翔

問4 傍線部イ「工場の動力としての利用は遅れ」た理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 **10**

- ① 電気は電灯事業で利用が始まったから。
- ② 電気は蒸気機関に比べて利便性が低かったから。
- ③ 工場で働く人の働き方や組織の体制を変えることに時間がかかったから。
- ④ 工場の設備とレイアウトの変更によくの費用がかかったから。

問5 空欄 、 に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① b 多方向 c 一方向
- ② b 一方向 c 双方向
- ③ b 一方向 c 逆方向
- ④ b 逆方向 c 多方向

問6 傍線部ウ「真の意味でデジタル社会が到来するのは、いまから約20年後の2040年以降になるのではないか」と筆者が考える理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 産業が社会の隅々まで広がるにはバブルが弾けてから30～40年かかるから。
- ② 人々の意識は昔も今もほとんど変わらないから。
- ③ 世界大恐慌は自動車株と電力株のバブルが弾けてから30～40年後に起きたから。
- ④ インターネットバブルが再び弾けたから。

問7 空欄 に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① しかし
- ② ただし
- ③ ようやく
- ④ すでに

問8 本文の主旨として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 農業分野でもデジタル化に意欲的に取り組んでいる生産者がいる。
- ② 真のデジタル社会の到来に向けた動きはすでに始まっている。
- ③ 真のデジタル社会が到来するまでには今から約20年の歳月を要する。
- ④ 私たち自身もスマホを利用し、デジタルとは無縁でなくなっている。

(以上)